



平成 27 年 10 月 27 日

提言「救急車に『再帰性に富んだ反射板（材）』の使用を！」を関係諸方面へ提出

一般社団法人 日本交通科学学会（会長：有賀 徹）はこの程、日本救急医学会・日本臨床救急医学会と連名で「救急車に『再帰性に富んだ反射板（材）』の使用を！」と題する提言をとりまとめ、8 月中に国土交通省自動車局・総務省消防庁・全国消防長会等の関係諸方面へ提出し、同時に趣旨説明を行って、実現に向けた訴求活動を実施致しました。

これは近年、夜間の高速道路上でトラブルに見舞われ照明を失った救急車が停止し、周囲に異常を知らせようと車外に出た救急救命士が後続車と接触し絶命した悲惨な事故の実例に基づいております。

昨年の本学会学術大会（第 50 回、於 昭和大学医学部）でこのことが報告されて以来、関係者が防止策を検討し、無電源でも被視認性を向上でき周囲にいち早い注意喚起が図れる方策として「回帰性反射材」の車体へ装着が好ましい、との結論に至りました。

回帰性反射材は、光源方向へ集中的に光を反射する特性を持ち、夜間の交通事故防止アイテムとしても知られておりますが、車両への装着は「灯火」の一種と見なされ、色や装着方法などが厳しく制約されております。

今回の提言は、法に抵触しない範囲で、反射材本来の意義である「事故回避と人命の尊重」に資する様、救急車を配備・運用する消防・救急実務者はもとより、車検等に際しても適切な指導・措置が得られるべく理解を求める内容となっております。

これについては各方面とも多大な理解と関心を持って受け止めていただき、国土交通省自動車局技術政策課からは 8 月下旬に各地方運輸局・自動車検査独立行政法人・日本自動車整備振興会連合会など車両審査関係の諸方面宛、また 9 月初頭には消防庁救急企画室から各都道府県消防防災主管課宛、全国消防長会からも所属会員である全国の消防・救急の拠点に向けて、それぞれ事務連絡を発信いただくなど早速の周知・検討が開始されたとの報を聞くに及んでおります。

日本交通科学学会は半世紀以上にわたり、交通の安全に関して、医学・工学・心理学など多方面の研究者や行政関係者、実務者等が連携して学際的活動と行動を行ってきた特色ある学会です。夜間の交通安全に関しても、反射板（材）の有効活用をはじめ永くテーマとして採り上げてきていることから、その知見を生かし、今後さらに夜間の道路交通が安全なものとなる様、鋭意、力を尽くして参ります。

●本件に関する詳細は、下記へお問い合わせ下さい。

一般社団法人 日本交通科学学会 事務所（担当：山本・平田）

〒164-0001 東京都中野区中野 2-2-3 株式会社へるす出版事業部内

TEL：03-3384-8058 FAX：03-3380-8627 E-Mail：jcts_jimu@herusu-shuppan.co.jp

（※本年 7 月より連絡先が上記の通りとなっておりますのでご留意ください。）



救急車への反射板（材）貼付イメージの例

（発端となった長野県北アルプス広域消防本部・吉沢彰洋氏の論文「救急車への視認性を高めるための反射材の使用についての考察」より引用したイメージモデル。 ※実際の貼付例ではありません。）



国土交通省 自動車局 技術政策課長殿
（中央右）を訪問、要望を提出。
中央左が有賀 本学会長。



全国消防長会会長殿（中央右）を訪問、
要望を提出。
中央左が有賀 本学会長。

●写真・図版の転載をご希望の場合は、
一般社団法人日本交通科学学会事務所
（山本・平田）までご一報下さい。